

中国おくの細道

— 華南の巻 —

高橋定幸

中国おくの細道

— 華南の巻 —

高橋定幸

中国おくの細道

——華南の巻——

一九九二年十一月十四日発行

著 者 高 橋 定 幸

神奈川県中郡大磯町高麗二一九―九
郵便番号二五五・電話(046)六一―五九三〇

制 作 主婦の友出版サービスセンター

東京都千代田区神田駿河台一―六

お茶の水スクエアC館2F

郵便番号一〇一・電話東京(03)三五四―三六四
印刷・製本 誠美堂印刷株式会社

中国おくの細道——華南の巻——目次

はじめに……………	3
広州鎮海樓にて(詩一篇)……………	7
石林にて(十四首)……………	11
安順にて(二首)……………	21
石林より昆明への道にて(三首)……………	22
西山龍門と昆明湖(二首)……………	26
「聶耳」の墓にて(二首)……………	29
貴陽から龍宮への道にて(九首、十四句)……………	31
龍宮にて(七首)……………	47
黄果樹瀑布、水蓮洞にて(二首)……………	53
布衣族の村にて(六首)……………	55
紅楓湖にて(二句、四首)……………	62
貴陽にて(七首)……………	66

はじめに

この歌集を読んでいただくについて、最初にお断りし、お詫びしておかなければならないことが三つあります。

一つは短歌歴について。私の短歌の勉強は学生時代を除いてはここ数年のものであり、しかも全く師匠につかず、同好の士との会合も持たない、いわゆる独りよがりの結晶であるということです。

旅行中に見たものを、ズバリ感情のおもむくままに表現したり、景色をそのまま述べてみたりしております。あるいはまた、歴史とのつながりの中で、勝手の解釈をして詠んでもおります。

短歌のルールもわきまえない身勝手な素人歌詠みとお笑ください。しかし一つでも拾い上げるものがありましたら幸いです。

二つ目は筆字です。

以前、漢字を田中真州先生に数年師事したことはありますが、その後十五年以上も筆を折り、現在のかな文字については、全く師匠を持たず書き散らして来ました。強いていえ

ば、三年ほど前、NHKの「書道に親しむ」という番組で、村上翠亭先生が「かな文字」で、俳句や短歌の書き方を指導していらつしゃつたのを時折拝見しました。

その美しさに魅せられて始めたのがきっかけで、自分なりに研究してきましたが、これも自分勝手な解釈でつくりあげたものです。皆さまの失笑を買うことになろうかと存じますが、この際、遠くから村上先生に感謝の御礼を述べさせていただきます。

三つ目は表題の「中国おくの細道」です。

俳聖芭蕉の「奥の細道」をもじつたものとして、到底許せないとお怒りになられることと思います。

神聖なる芭蕉は、現在もお脈々として研究者のなかに、いや日本民族の心の中に生きており、侵すことのできない聖域とされています。それをあえて「中国おくの細道」としたのは、平成の代に変わって、一人くらい変人があっても面白いのではないだろうか？という軽い気持ちと、母なる国・中国を、裏から率直に詠んでみよう……という横溢する一途な情感から出たものでもあります。

一般の観光で見る景色とは、別の角度から、覗いてみることに興をそそられたのです。彼らの懷の中に飛び込んで見ることに、狭い路地裏と、そこに渦巻く人、人、黒く泡をふく

どぶ川、貴重な史跡がいまなお放置されている現状などを、そのまま詠んでみたかったです。

以上三つの点で、私の「唯我独尊」的発想からの所産であることについてお詫びしておきたいのです。

しかし、本音は私ごとになりますが、中国が好きで好きでたまらないのです。私の体質がたまたま、世界中のどこの民族よりも、中国と中国人を愛するよう宿命づけられているのかもしれませんが、この中に一首でも二首でも受けとめていただける歌があり、お知らせくだされば幸いです。

書の方の末尾にある「夕柿^{ゆかし}」は私の雅号です。明るい夕日を背景に、柿の木に残っている実が色鮮やかに映えている、そんな自然との調和をもとにしてつけました。「遊柿」とも書き変えたりもしています。落款の篆刻も自分で試みました。

なお、引き続き「江南の巻」「中原の巻」……と発表する予定です。ご高覧ください。

一九九二年八月

高橋 定幸

一九九二年三月二十七日から四月四日まで。石林、昆明、貴陽を取材する。今回は特に、貴州の少数民族と、中国随一の黄果树瀑布、水蓮洞を目的とした。

広州から入り、石林を再度見学することになったが、雨期前の石林は、新緑とともに冬とは別な素顔を見せてくれた。

昆明から安順（貴州）までの夜行列車も、けっこう楽しかったが、安順から龍宮へ、さらに貴陽から黄果树への道程も、強烈な印象を私に与えてくれた。

道の両側に拡がる「そら豆」の海と、「菜の花」の洪水。一時間半から二時間半くらい車で走る間、一望千里、花、花、花……、中国の奥深さを知ったひとときであった。

近代的な農業機械を持たない農民が、霞む丘陵地帯の上まで、ほとんど人力で耕作したであろう。それにしても特に、「菜種花」の黄色は印象的だった。三月二十日から四月十日くらいまでのほんの僅かな時期を逃さないことはとてもむずかしい。

いま一つ、「龍宮」「黄果树」「紅楓湖」「貴陽」を除いて、感銘深かったのが、少数民族「布衣族」との交流だった。

小学校も、私たちのために、授業を中断して、踊りや唄でもてなしてくれた。部族の半数が農作業に出て、半数が私どものために食事など、接待に総がかりしてくれているとの

こと、観光収入を大事にしているのが良くわかった。けっして珍しいことではないようだ。それでも、各家庭から出された白酒は、それぞれに味の違いもあり、けっこう楽しかった。老婆の黒い平たい顔立ちに、時折見せる白い歯が忘れられない。

三月二十九日、広州鎮海楼にて（詩一篇）

石林へ飛ぶための一泊だったが、たまたま郊外の鎮海楼に遊ぶ。埃っぽい古街には、榕樹の街路樹が芽を吹きはじめ彩りを添える。榕樹には二種類ある。「ガジュマル」と、プラタナスに似た優しげな広葉樹。これらを一般にプラタナスとよんでいる。片や緑が深く大樹であり、片や淡い萌黄色の細木。

鎮海楼のある公園は、これらの榕樹がことのほかおおく、今日のような冷雨にうたれた姿は、新鮮で心が洗われる。もっとも、中国の白壁煉瓦作りの家屋が背景にあつてのことか？ 鎮海楼からの眺めは、一段とその感を強くする。濃い緑と萌黄の色が、波のように足下にひたひたと寄せて来る感じ。

その中に朱色の花をつけた木が数本まじって、見るものに鮮烈な印象を与える。「綿の木」といって濃いあつぽつたい赤。オレンジ色の花もあるとのこと……。

遊五仙山

華南三月春未久人知春已過
今日亦煙雨去去行行殘日冷
恁君方盤海樓上遊遊
榕樓煙雨清空色新
前黃公孫交前黃公孫
交女如女如或如女如
更上樓上心
一望榕樓公孫波
足下洗心

頭を廻さず忽ちとて峻然と朱木あり
名もアミハ「松の木」なりと
桐木に似て枝先に朱層をむね
たゞ、實はけつある大木の果物
木の朱の鮮やかなるを
榎林の中にありてちとあり
榎のふちを忘れ去るをあるに
さもありむなりへの傳へり
五羊の遊る山を此なりと



遊五仙山

華南三月春盛んなりと聞けど

今日亦煙雨去らずして終日冷たし

吾北の方鎮海樓に遊べば

榕樹煙雨に浴し容色新たなり

萌黄は緑に变じ緑は萌黄に变ず

その容色乙女の如く或いは熟女の如きか

更に樓上に登れば

一望榕樹の緑波ひたひたと足下あしもとを洗ふ

頭を廻らせば忽然として峻烈な朱木あり

名を問へば「綿の木」なりと

桐木に似て枝先に朱房をおく

花か実かはたまた天上の果物か

その朱の鮮かなること

榕樹の中にあつて甚だ烈し

樓上の人々時を忘れて去るをあたはず

さもあらん古しへの伝へに

五羊の遊べる山なればなりと

三月三十日、石林にて（十四首）

午後三時半を回って、落日が殊のほか鮮烈に燃えている。

何億年前だろうか。「ヒマラヤ山脈」とともに創作された石林の神秘は、人間の想像を絶する。

奇岩、剣峰……いろいろに表現されているが、地底から湧き出て、剣を揃えて押し迫ってくる様子は筆舌につくしがたい。奇岩の間には、竹林、海棠が柔らかく人を迎えてくれているようで、ホッとする。

しかし風雨に浸食されて、各所にひび割れも見られ、今日の姿は、明日の姿ではないかもしれない……。

望みの

海へ

よるをせり出でしこの世の奇石夕映えてあやし

夕映え

了

いにしへの海の底よりせり出でしこの世の奇石夕映えてあやし

いふふに天をつくりし奇観なり
石林は夕日かきしる

いにしへに天のつくりし奇観たりここ石林に夕日傾ぶく

初るるき岩間を汗して過ぎる
色あはれとくるとくるとくると
九三三三三三三三三三三三

昼暗き岩間を汗して過ぎくれば色なす水は深く止れり

雄叫びか剣をうろくして
けしきも地底より湧く

雄叫びか剣をそろへて押し寄する兵士どもが地底より湧く

雄叫びか風をうろくして
けしきも地底より湧く

雄叫びかはたまた風か地底より剣をつきたてヒタヒタと寄す